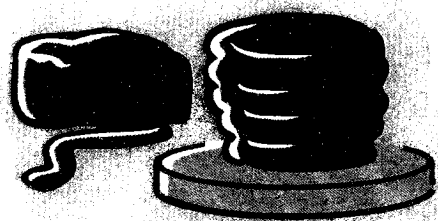


平成25年度 初めての方お勧めコース

陶芸入門講座



講師：高木 信之氏

ふちゅう生涯学習センター

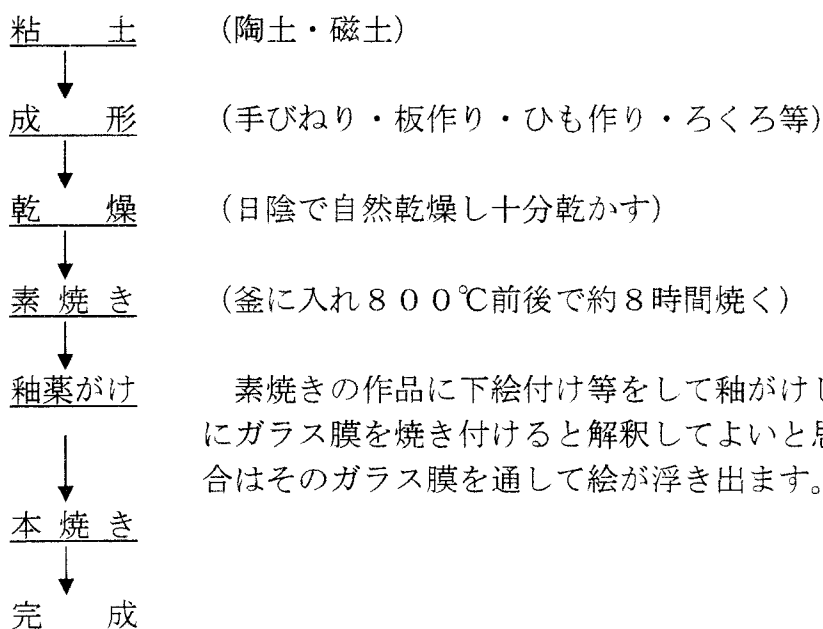
制作にあたって

- 1 15%程度収縮します。
粘土は乾燥させたり、焼成したりすると収縮します。
形を作る場合、ちょっと大きすぎるかなと思うくらいで、仕上がりは丁度良い大きさになります。
- 2 土をよく練る。
土が均一になり使いやすくなります。また土の中の空気も除いてくれます。
空気が入っていると焼成中に壊れてしまい、大変危険です。
- 3 土をよく締める。
粘土には水分と空気が含まれています。それを追い出して粘土自体を緻密にすることを「土を締める」と言います。
締めが悪いとひび割れ、ゆがみ等の原因になります。

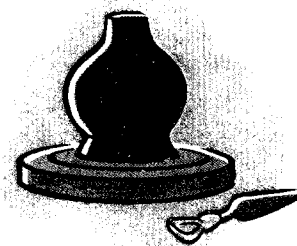
★制作する前に、次のことを頭の中に入れておいてください★

- ・初心者の方はどうしても制作意欲が先行してしまい、技術面がおろそかになりがちです。あせらずに、ゆっくり技術取得していきたいものですが、アマチュア陶芸はやはり失敗があっても楽しく制作できれば良いと思います。
- ・成形時、釉がけ時の注意すべき事は細かに説明するときりがありませんので、何度か失敗を繰り返し、自分自身で体得して行くしかありません。まず、粘土と無心に遊んでみてください。そこから制作の楽しさと陶芸の奥深さが開かれていくと思います。

焼物ができるまでの工程



素焼きの作品に下絵付け等をして釉がけします。これは陶器の肌にガラス膜を焼き付けると解釈してよいと思います。絵付けした場合はそのガラス膜を通して絵が浮き出ます。



アマチュア陶芸入門

《序》

土を焼くだけのものであった「焼物」が、技術の進歩により美しい色に彩られるようになって、また、手作りから機械化へと進んでも、土を焼くという焼物の本質には、今も昔も何ら変わるところはありません。

プロの陶芸作家、職人しか関わることのできなかつた焼物が、今日のようにアマチュアに楽しめるようになったのは、一番に、焼き上げる窯（かま）が身近なものになったからに他ありません。燃料を天然の薪に頼っていた登り窯等に比べ、今日では重油、灯油、ガス、電気の窯が出現したからです。

陶芸は火の芸術、土の芸術と言われます。焼き上げる窯があれば、あとは人の手による土の芸術、土との対話・葛藤が我々の作業となります。この「土との遊び」が、アマチュア陶芸の真髄ではないでしょうか。

「土を殺さない」作業が一番の基本です。初心者の陥りやすい失敗の一つが、まずこの辺にあります。制作意欲のみが先走り、つい頭の中で築き上げた型に近づけようとするあまり、土の性質を無視し、無理矢理、成形を優先させてしまうのです。土の性質、土のいのちを知るためには素直に土と遊んでみるしかありません。土と遊んだ結果としての自分の作業を認知できない人は、陶芸店、スーパーで用途・機能を最優先して制作された陶器を買ってくればよいのです。

用途、機能を優先し制作された陶器にはない何かを求めるからこそ、アマチュア陶芸の道が開かれるのです。ただ単に技術的に優れた器だけが良いとするのなら、とうてい永年携わっている陶芸職人にはかないません。職人は「用途の為の器作り」のプロです。職人個人の感性は二の次なのです。

その感性を前向きに出して制作するのが陶芸作家です。芸術としての陶芸をする人々なのです。ですからアマチュア陶芸は、どちらかという後者の陶芸作家に近いわけです。したがって、素直に土と遊んでみるのが、とりもなおさず「自分の感性を伴った陶器」が出来上がるのです。世界に一つしか存在しない器、そして人間がいつか見失ってしまった素朴な感性が蘇るのです。

具体的には、「土との遊び方」と言っても文章では複雑多岐になってしまいますので、ここでは制作上の諸注意を示すに留め、制作手順を追ってみることにしましょう。

【陶土・磁土】

いわゆる「粘土」で、市販されています。

【成形】

一般的には、手びねり・タタラ作り（板作り）・輪づみ（ひも作り）・ロクロ（蹴ロクロ・手回しロクロ・電動ロクロ）という方法があります。

他に大量生産用に機械ロクロ・鑄込み作り・プレス作りがあります。

【乾燥】

成形後、作品を日陰乾燥する。

【素焼】

乾燥した作品は、通常 800℃前後の温度でいったん素焼きされます。
これは、次の施釉（釉薬掛け）時の作業を容易にするためです。

【施釉】

本焼き前の大切な作業です。

まず、素焼きされた自分の作品を前にして考えなければならないことは、

- A 備前焼や設楽焼のように釉薬を用いず、粘土自体の素肌の持ち味を生かすため、このまま何もせず本焼きに持ち込む？
- B 呉須（下絵付け用の鈹物顔料）等で自分自身の手描きをほどこすか、あるいは「黒天目」「青磁」「辰砂」等の色釉薬を施して仕上げる？
- C 「A」「B」の両方を併用してみる？

Aの場合はそのまま本焼きです。

B・Cの場合、施釉前に作品の底にサイン等を入れた後、その底の部分にロウ付けをします。それは施釉時、底に釉薬が付着しないようにするためです。釉薬は本焼時ガラス状になり、窯の中の棚板にくっついてしまうからです。

施釉の仕方は釉薬により違いますが、バケツに入った釉薬に浸して掛ける場合は、平均的には3～5秒浸します。官製ハガキの紙の厚さが目安です。2種類の釉薬を掛け合わせる時は、互いに薄めに浸すのが良好です。また同じ釉薬でも薄掛けにしたり、厚掛けにしたりしても面白い効果が出ます。

【本焼】

この講座では、トロ火から始め、約9時間かけて1250℃に達するまで焼き上げます。（通常陶器の場合で1250℃、磁器で1300℃です。）

その後、その温度を約1時間持続させてから消火します。消火してから約2日かけて自然に冷却させてから、いよいよ窯の扉を開け作品を取り出します。

《まとめ》

本焼の窯詰めまでの作業はすべて自分の目、手で感知して制御できますが、窯の中に入ってしまった作品は火の洗礼に任せるほかなく、祈る気持ちで窯出しを待つしかありません。極端な例として、自分の想像とはおよそかけ離れた、見るも無残な作品との対面もあります。

もし、せっかく出来上がった茶碗にヒビが入ってしまったとします。当然、水等を入れることはできません。でも、自分の作った「可愛い分身」である事に変わりありません。絶対に、ゴミ箱に捨てるなんてことはできないでしょう。水は入れられなくても、必ず他に活かせる用途があるはずです。

「アマチュア万歳！」と言うところでしょうか。

陶芸入門 工程

